

# シンポジウム I ポストコロナ・ウィズコロナの病院経営

10月6日(木) 10:00～12:00 第1会場(旭川市民文化会館 1F 大ホール)

## S1-2 ポストコロナ・ウィズコロナの病院経営

京都第一赤十字病院 院長

いけだ えいと  
池田 栄人

当院は京都市内の救命センター・周産期センターを有するDPC特定病院(608床)で、令和3年度の医業収支が実際は4.2億の赤字でしたので、令和4年度の経営目標は、医業収支の黒字化です。急性期充実体制加算が追い風になりますが、以下のような施策および方針を考えています。

①今後、新入院患者数の伸びは大きく期待できず、診療単価の増加が重要で、特に手術および三次救急体制が大切になります。手術室の増設(ダビンチ専用、ハイブリッド手術室、緊急手術対応)、特定看護師の養成(麻酔科領域)、救命センター体制および看護体制の見直しなどについて、本年より3年計画を開始しました。

②コロナ禍ではコロナ病床確保のため稼働病床を減じての運用となり、効率的な病床運用が必要となりました。電子カルテと連携した病床管理ツールとして、メディサイヌスを導入し、リアルタイムの病床情報の共有化によるマネジメント強化を行いました。今後、ポストコロナを鑑み、病床のダウンサイジングを考えています。

③効率的な医療を求めると、高齢者へのIC・治療内容などの意思決定支援(医療倫理)、および、医療安全への配慮が重要になり、取り組み強化を始めました。

④医師の働き方改革への取り組みは待ったなしですが、各部門へのタスクシェア・タスクシフトについては丁寧なコンセンサス形成が必要です。特に、採用計画については、今後、医療需要の減少が予測されるので、各部門の業務内容を踏まえた上での10年計画が必要と考えています。

⑤全社統合システムの利活用により、すべての職員を対象にした情報共有化、および、業務効率化に取り組み始めています。

⑥以上の方針の院内への周知徹底のため、年2回の幹部研修会、業務連絡会を再開しました。

⑦また、同じ京都市内にある京都第二赤十字病院との連携が大きなテーマであり、事務・調度部門、クリニカルパス、看護専門学校、電子カルテの統合などについて、検討を開始しております。